

大山の森だより

2024年秋号

「無為自然(むいぜん)」

2024年は、日本で自然保護憲章が制定されて50周年に当たり、9月11日には東京で記念シンポジウムが開催されます。

日本では明治以降、英語のネイチャーの翻訳語として仏教用語の「自然(じねん)」が使われてきました。しかし「自然」という言葉は仏教より先に中国に存在していました。それが「無為自然」です。

仏教がインドで始まった紀元前6世紀ごろ、中国では老子が「道」を説きました。

「道」は、人としての在り方だけでなく、さらに大事なものとして、天地や万物が生み出される際の根本的な原理、あるいは根拠という意味が含まれています。万物が「道」に順って生きていく(存続する)のに基本となるあり方が「無為自然」です。「自然」は「自(おのず)から然(しか)り」、他からの影響を一切受けることなく、大昔からそれ自体がそのようであるさまをいい、「無為」は「なんら作為をしないとこと」という意味になります。つまり「無為自然」は「なんら作為をせず、あるがままの状態」です。

これに対して自然保護という概念は、意識的に自然に係っていくことになり、無為自然とは反しているように感じられます。しかしこの自然の中に私たち人類も含まれると考えた時、自然保護とは自然再興(ネイチャーポジティブ)に近い意味となります。そして最終的に地球の未来を見守り続ける無為自然的なあり方に行きつくのだと思います。



6~7月 自然ふれあい事業 活動報告



○榎水高原 草原の花と昆虫観察会

開催日: 6月8日

観察会ではまずノハラアザミなど草原に咲く花をじっくり観察し、集まる虫を観察し花と昆虫の関係を考えました。また蝶は遠くから観察するだけでなく捕獲して観察。榎水高原にどのような蝶が生息しているか調べました。



○鏡ヶ成 高地湿原の花観察会

開催日: 7月6日

まず湿原の入り口で自然公園財団も加わっている草原の保全と湿原の復元活動について説明。草原湿原では花々と花に集まる昆虫を観察しました。花の構造と昆虫との関係に参加者は驚いていました。

■自然公園財団では、季節ごとに観察会などを開催しています。

予約なしでも参加できるイベントもありますので、是非ご参加ください。

裏面にイベント情報を掲載しています。





大山のクルミ オニグルミ・サワグルミ・ノグルミ

クルミの語源は包み実(くるみみ)、黒実(くろみ)など諸説あり、漢字では胡国(ペルシャ)から来た桃の種に似た植物という意味で胡桃と表記されます。私たちが普段ナッツとして食べるクルミは、日本では自生していないテウチクルミ(ペルシャグルミの変種)の実から採られています。日本には3属3種類のクルミの仲間があり、大山にはその3種とも自生しています。それぞれ生育する環境が違い、見た目も同じクルミの仲間とは思えないほど違ってきます。



オニグルミ:主に山間の川沿いなどでよく見られます。大型の奇数羽状複葉で、特に初夏の開花時期には垂れ下がった雄花序と共によく目立ちます。実は食用になりますが、広く市販されているテウチグルミやシナノグルミに比較してやや小さく、殻が厚めで非常に堅いので、種の中身(仁)を綺麗に取り出すのは容易ではありません。その分、味は濃厚で保存性が良く、リスやネズミの食料として重要です。実がきれいに二つに割れていたら、それはリスがクルミを食べた食痕。森にすむアカネズミはクルミの側面のど真ん中に円形の穴を開けて食べます。(写真右上)

サワグルミ:日本全国の沢など山間の湿った場所に生えます。ブナ帯の沢沿いで普通に見られ、溪畔林の代表樹種でもあります。オニグルミが横に広がるように育つのに対し、サワグルミはスラリと上に伸びる特徴があります。葉の形は大形の羽状複葉で樹高は30メートルほどになります。4~5月頃に淡黄緑色の単性花が密生した尾状の花序を垂らし、夏に2個の小苞が残った翼のある堅果を房状に付けます。実は残念ながら食料になりません。



ノグルミ:名前は葉や樹形がクルミに似ていて日当たりのよい山野にみられることに由来します。果実は革質の硬い鱗片で覆われ、形状は長楕円形でハリネズミに似ています。これは、トゲトゲしていて触ると痛く、食用にもなりません。最近では実をドライフラワーのような装飾に使うこともあります。材は燃やすと沈香のような良い香りがするらしいです。

〇コラム1:オニグルミの割り方・煎り方・実の取り出し方

秋にオニグルミの木の下を歩くと、黒ずんだ梅の実のようなものがたくさん落ちています。そのどろどろした皮の下にあるのが食用になるオニグルミの種です。その種をきれいに洗って一晩水につけます。翌日、水を切ってフライパンに広げ、中火で10分ほど乾煎りします。粗熱をとった後、少し開いた殻の口にマイナスドライバーを差し込み、こじ開けると濃厚で甘い仁が現れます。ただし仁は殻からきれいいには外せないで、殻に引っ付いた仁は竹串などでほじり出します。

〇コラム2:大山のリス

大山に生息しているニホンリスは、夏は赤褐色、冬は灰褐色に毛色が変わる小型のリスです。ほぼ樹上棲なので見かけることはありませんが、森の中の車道を横切るところを見かけたことが何度かあります。また冬眠をせず、日中活動するのでスノーシューイベントの下見で見かけたことも。中国地方では生息数がかなり少ないので見かけたらラッキーだと思ってください。



森と川を結ぶ寄生虫

ハリガネムシ



大山寺の石の大鳥居から横手道(小鳥の道)に入る車道の横に、森からの湧水を貯める岩の手水鉢があります。ここは清浄泉といって、かつて横手道から大山寺にお参りする人がこの水で身を清めた場所です。今でも森から湧き出た冷たい水が岩のくぼみに常に溜まっています。

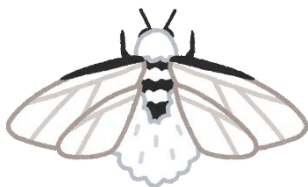
秋、横手道のハイキングの際にその泉で手を清めると、底の方に白い「そうめん」が見つかります。誰がここでそうめんを食べたんだ?とよく見るとそのそうめんがくねくねと動いている!!

そのくねくねと動くそうめんの正体が寄生虫ハリガネムシです。昆虫好きな方はカマキリに寄生するハリガネムシを知っておられるかと思いますが、このハリガネムシの寄生先は森の掃除屋カマドウマと思われます。カマドウマは羽の無いキリギリスのような形をしたバッタの仲間で、主に小昆虫やその死骸、腐った植物を食べており、森の中に無数にいます。



寄生したハリガネムシは宿主のカマドウマの脳を操り、水辺に誘いおぼれ死なせます。腹から出てきたハリガネムシは水中で産卵。卵はカゲロウなどの水生昆虫に飲み込まれ、水生昆虫が羽化して飛び立ち、死んでカマドウマに食べられると、そこで大きく育つというライフサイクルを繰り返します。ただただ気持ち悪いのですが、溪流の魚にとってハリガネムシに操られて水に飛び込むカマドウマが重要な食糧になっているそうなので、大自然の仕組みということなのでしょうね。ちなみに人には無害です。

○大山の雪虫「ゆきんこ」



体長5ミリ前後

晩秋や初冬にふわふわと飛ぶ綿のような虫を一般に雪虫と言います。大山周辺では「ゆきんこ」と呼ぶそうです。実はアブラムシの仲間で、雪のような白いものは蠟物質です。雪虫は東北地方や北海道など寒さが厳しい地方では大量発生しますが、大山周辺ではあまり飛びません。北国の雪虫は「トドネオオワタムシ」や「リンゴワタムシ」というアブラムシの一種で、大山で見られる雪虫とは種類が違うようです。

大山で見かける雪虫は、ウルシ科の落葉高木ヌルデに虫こぶヌルデミミフシ(五倍子)を作るヌルデシロアブラムシの可能性が有ります。ヌルデシロアブラムシは晩秋に虫こぶから飛び立ち、チョウチンゴケに卵を生んで幼虫で越冬。春にまたヌルデに戻って繁殖するようです。ちなみに虫こぶ(五倍子:右写真)は、タンニンを多く含み、インク・染料の製造に用いられました。

大山の雪、待ち遠しいような、待ち遠しくないような。



ーイベント情報（10月～11月）ー



■自然公園財団のイベント

<p>○大山寺 阿弥陀堂周辺の知られざる遺跡を探る</p> <p>開催日：10月26日(土) 9:00～12:00頃 会場：大山寺 阿弥陀堂周辺 集合場所：自然公園財団事務所前 参加費：1500円 ※健脚向き</p>	<p>木々が色づき始める大山のブナの森。阿弥陀堂の背後の森には夏山登山道につながる道の跡があります。その合流点から望むのは常行谷奥にある謎の平坦地。そこに何があったのか。初秋の大山で謎の遺跡を探索します。</p> <p>定員：10名 歴史探訪</p>
<p>○奥大山古道ウォーク(共催事業)</p> <p>開催日：11月10日(日) 8:30～15:30頃 会場：江府町鍵掛峠・御机・下蚊屋 集合場所：エバーランド奥大山前 参加費：3000円</p> <p>※詳しくは江府町のホームページをご覧ください。</p>	<p>鍵掛峠から紅葉の奥大山古道を歩き、伝統の下蚊屋荒神神楽を堪能します。後醍醐天皇や大山寺参拝者、牛馬市の博労たちの旅を追体験します。</p> <p>●お問い合わせ先：9月末ごろ募集開始 奥大山古道保存協議会事務局(0859-75-6008)</p> <p>定員：80人 ウォーキング</p>
<p>○金門周辺の知られざる遺跡を巡る</p> <p>開催日：11月23日(土・祝) 9:00～12:00頃 会場：大山寺 金門周辺 集合場所：自然公園財団事務所前 参加費：1500円 ※健脚向き</p>	<p>かつて巨大な扁額が掲げられた金門周辺には忘れ去られた遺跡が点在します。風穴と呼ばれた巨大な氷室や中世の雪室跡、御旅所跡と思われる高台の平坦地からは美保湾を見下ろします。尾根上の求聞持堂跡にも。</p> <p>定員：10名 歴史探訪</p>



自然保護憲章 50 周年記念シンポジウム ネイチャーポジティブによる社会変革

お知らせ

9月11日(水)、東京都の星陵会館ホールで自然保護憲章制定50周年を記念したシンポジウムが開催されます。自然保護憲章は、1966年に大山鏡ヶ成で開かれた第8回国立公園大会の決議を発端とし、国民会議による議論を経て制定されました。自然保護憲章の意義と社会変革を展望するシンポジウムはオンライン配信で視聴も可能です。

共催：(公財)日本自然保護協会、(一財)自然公園財団、経団連自然保護協議会、環境省

※大山からは、大山自然公園指導員の会、大山の頂上を保護する会が協力団体として登録されています

お申込み・詳細は

自然保護憲章50周年記念シンポジウム特設サイト

<https://www.nacsj.or.jp/2024/07/40807/>



ネイチャーポジティブ
イメージキャラクター
「いだいらボジー」

オンライン配信(9月11日 13:00～) <https://www.youtube.com/live/69PxAHA8rTk>

※ネイチャーポジティブとは日本語訳で「自然再興」といい、

「自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる」ことを指します。

一般財団法人 自然公園財団 鳥取支部 大山事業地

〒689-3318 鳥取県西伯郡大山町大山40-33

大山ナショナルパークセンター(大山 NPC) 1階

TEL:0859-52-2165 FAX:0859-52-2370

URL <https://www.npfj.or.jp/daisen/>



ホームページ QR コード

※ホームページのアドレスが上記に変わりました



一般財団法人

自然公園財団

Natural Parks Foundation